＜原著＞

古今和歌集139番歌の解釈

小　澤　次　郎*

要　約：本稿では、古今和歌集139番歌における《……已然形＋接続助詞「ば」》の構文の解釈の問題を考察する。

キーワード：古今和歌集、和歌、解釈、詠歌状況、橘、香り、已然形、接続助詞「ば」、順接確定条件、偶然条件、恒常条件。

§1　表現文法

日本における国文法[注1]の場合、それはあたかも「法律」のように、国語にかかわるものに対して、絶対的な規範として、そしてその遵守を強制する存在としてみられてきた。事実、高等学校までの「国語」の授業において、基本的な日本語の文法構造を理解し、そのうえでさらに学生自身のことばでもって説明のできる学生が、いったいどれほどいるだろうか。たとえば、高等学校や、大学における基礎教育課程（「一般教育課程」「教養課程」ともいう）の「国語」の授業や講義のなかで、どれくらいの高校生や大学生が、助詞「が」と助詞「は」だけを入れ替えたときの文の微妙な意味の違い――すなわち「私が日本人です」と「私は日本人です」のニュアンスの違い――をわかりやすく説明できるだろうか。あるいはまた、どれくらいの高校生や大学生が、直接目的語をとらない自動詞を述語とする能動態の文と、それを受動態に改めたときの文における微妙な意味の違い――すなわち「雨が降る」と「雨に降られる」のニュアンスの違い――をわかりやすく説明できるだろうか。残念ながら、あまりいないのではないだろうか。

わたしは悲観的に過ぎるだろうか。こうした現象を惹起させる主要な要因のひとつとして考えられることは、国文法が忌まわしい独裁者のつくった法律のように学生を一方的に支配し、ひたすら学生に、理解されるよりまえに、その遵守を強制してきたことである。そうした積み重ねの結果として、もはや必要に迫られた一部の研究者や好奇心旺盛な好事家を除いてしまえば、「国文法」は一般社会の人びとから忌避されてしまったのが実状であるだろう。

このような日本語にかかわる悲惨な状況に対して、その打開をめざして、「表現文法」を唱えた人物に、北原保雄がいる。北原によれば、「表現文法」とは、「表現の豊かさを掬い、表現の自発性を促す」[注2]ためのものであるという。この考え方の背景には、従来の「国文法」の在り方に対する痛烈な反省があったに違いない。それはつぎにあげる記述のなかにも明瞭に表われている。

> これまでにも表現文法的な考え方はあったが、それらは規範文法的なものであった。こうあるべきだということだけが述べられた、非常に肌理（きめ）の粗い、骨組みだけの文法であった。極端に言えば、現実との対応を欠いた、文法のための文法でしかない[注3]、

このように述べた後で、北原はさらにソシュールの言語学上の概念を援用しながら、考察をすすめ、

> 表現活動の中からラングを取り出して、抽象的な言葉を分析するのが従来の文法であるが、表現文法はランガージュの混沌の中に入り込んで、表現活動の中にあるルールを問題にする[注4]

という「表現文法」の在り方を示した。しかし、残念なことに、北原のいう「規範文法」における「規範」と、表現文法における「ルール」とが、どのように異なるのか、という問題については、必ずしも明確に示されたわけではない。けれども、北原が「表現文法」を提唱することによって、文法と創造的な言語活動とを相互にダイナミックに関連づけて考える地平がひらかれ、今までややもすれば個人的な印象批評に終始してしまうきらいのあった創作鑑賞に対しても、学問的な立場から分析する可能性が開けたことは、大いに評価されてしかるべきであろう。

考えてみれば、外国語を習得するときに文法が不可欠

＊人間基礎科学講座

であるとされるのに、国語としての日本語を学習する場合に、第一言語（母国語）であるために、なまじ日常生活において日本語が使えるため、国文法がなおざりにされてきたことは、じゅうぶんに憂慮されてよかった。なぜなら「ルール」のよくわからないままに、ゲームに参加させられたのも同然だからである。

§2　《……已然形＋接続助詞「ば」》の構文

さて、こうした表現文法の理念をふまえた場合に、「文脈」がどのように理解され、また表現されてきたかを考察することは重要なテーマである。そこで、ここでは文と文を繋げながら、前後の関係を表現する構文として、古文における代表的構文《……已然形＋接続助詞「ば」》を検討してみたい。

この構文《……已然形＋接続助詞「ば」》には四つの用法がある。すなわち、第1用法の逆接確定条件、第2用法の順接確定条件、第3用法の偶然条件（単純接続による確定条件ともいう）、第4用法の恒常条件（一般条件または恒時条件ともいう）である。

第1用法の逆接確定条件は、おもに上代（奈良時代）にみられるものであり、中古（平安時代）以降、逓減していき消滅した。この用法でつかわれたときの構文上の特徴は、つぎに挙げた用例からも明白なように、その大半が《……係助詞「も」……打消の助動詞「ず」の已然形＋接続助詞「ば」》という定型でつかわれる点にある。

卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺を来鳴きとよもす（『万葉集』巻8・1477）
〈大　意〉
卯の花もまだ咲かないのに、ほととぎすが佐保の山麓あたりを通って来て鳴き騒ぐ

秋立ちて幾日(いくか)もあらねばこの寝ぬる朝けの風は手(た)もと寒しも（『万葉集』巻8・1555）
〈大　意〉
秋になって、まだ幾日も経ってないのに、このわたしの寝るところに吹く朝の風はたもとに寒く感じるなあ。

「光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨」と宣(のたま)ひも果てねば、六野太うしろより寄ッて、薩摩守の頸をうつ。（『平家物語』巻九「忠度最期」）注5
〈大　意〉
「阿弥陀如来の慈悲の光明は全ての十方世界を照らし、念仏を唱える衆生を全て救い取って見捨てることはない」という往生を願って念仏のあとに唱える『観無量寿経』の経文をお唱えもきらないのに、六野太が背後から近づいて、薩摩守・平忠度の首を討ち取る。

と、これらの逆接確定条件の用法は、已然形に下接して逆接確定を意味する接続助詞「ど」「ども」と意味機能が近似することから、時の経過を経るにしたがって、明らかに逆接確定の意味を表す接続助詞「ど」「ども」を使用する頻度が多くなっていき、第1用法は接続助詞「ど」「ども」の構文へと収斂し、ついには消滅したものと推定してよい。

これに対して、第2・第3・第4用法は、上代以降、近世（江戸時代）にいたるまで、よくみられる。けれども、第2・第3用法と第4用法には、大きな相違点もみとめられる。すなわち第2・第3用法は一回だけ起こった特定の出来事を対象としているのに対して、第4用法は、自然科学の法則と同様に、条件をみたす普遍的な出来事を対象としている点である。換言すれば、第2・第3用法の場合、たった一度だけ起こった出来事にしか使えないのに対して、第4用法の場合は、何度でも同じ出来事が継起するときにも使えるのである。

ところで、《……已然形＋接続助詞「ば」》の構文は、中世の中ごろ（室町時代）より、順接仮定条件を示す用法もあらわれてくる。近世（江戸時代）後期以降、この仮定条件の用法が優勢となって、近代（明治時代）に至り、已然形は仮定形へとみなされるように変化して、現代語における順接仮定条件の構文《……仮定形＋接続助詞「ば」》を形成するに至る。

§3　『古今和歌集』139番歌における解釈の揺れ

ここでは、《……已然形＋接続助詞「ば」》の意味機能を具体的に考えるために、『古今和歌集』入集の歌の中でも特に有名な歌である139番歌を、例として検討してみたい。

さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする

この有名な「よみ人しらず」の歌の大意は、現在ではつぎのように解釈されている。たとえば、新日本古典文学大系の『古今和歌集』注6では、

夏の五月を待って咲く花橘の香りをかぐと、もと知っていた人の袖の香りがする思いだ。

また、新編日本文学全集の『古今和歌集』注7では、

五月を待っている橘が咲いて、その花の香をかぐと、昔親しかったあの人の袖の香りが思い出され、とても懐かしい気分に誘われるよ。

また、同じ新編日本文学全集であっても、『和漢朗詠集』注8におけるこの同じ歌は、

五月になるのを待って咲き始める橘の花の香をかぐと、昔親しくしていた恋人の袖の香りがすることだ。

と解釈される。

橘の花の香を前提としつつ、「昔の人の袖の香」に焦点をもってくることで、季節感から導かれた花の香りの中に、「昔の人の袖の香」という人事を絡ませる感覚的な発見を巧みに表現したものといえよう[注9]。同じ歌でありながら、注釈者によって解釈の在り方が微妙に異なりつつ揺れている。このことから、ことばの意味を解釈するという行為についての重要な示唆を得ることができる。すなわち、ことばの意味は必ずしも固定化された一義的なものではない、という示唆である。同じことばであったとしても、それが使用される状況によっては、ことばの意味は当然ながら変異していく。逆に、ことばの意味をあえて違えて解釈することが可能である場合、今までの解釈に対応していた状況とは異なった状況の存在を想定することが可能となる。歌の解釈とその歌の詠まれた状況は、さながら兄弟星（二連星）が互いの引力によって影響を及ぼし合いつつ旋回運行するように、相互に密接な影響を及ぼし合って成立しているのである。

ここで、もういちど『古今和歌集』にもどってみよう。

さつきまつ山郭公うちはぶき今もなかなむ去年のふる声（137・よみ人しらず）

五月こば鳴きもふりなむ郭公まだしき程のこゑをきかばや（138・伊勢）

さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする（139・よみ人しらず）

いつのまにさつき来ぬらむあしひきの山郭公今ぞ鳴くなる（140・よみ人しらず）

この『古今和歌集』巻三の配列をみる。すると139番歌の前にある138番歌が「五月来ば」(もし陰暦五月になるならば）と順接仮定条件で表現されることで、まだ陰暦五月が来ていないことが示唆され、そして後にある140番歌が「いつのまに五月来ぬらむ」(いつの間にか陰暦五月が、今まさに来てしまっているのだろう）と完了の助動詞「ぬ」および現在推量の助動詞「らむ」によって、すでに陰暦五月が来てしまっていることが明示されている。137番歌にも「五月待つ」があることから考えれば、「五月待つ」とは、「五月が心待ちにされるようになる、五月になる少しまえの時期」を意味するものといえるだろう。

ところで、この「五月待つ」は、すでに引用した解釈をみても、「花橘」を修飾するものと考えられているようである。たしかに137番歌の「五月待つ」が「山郭公」を修飾するならば、「陰暦五月になるのを待って鳴く」と解釈でき、そのことから139番歌の「五月待つ」が「花橘」を修飾し、「陰暦五月になるのを待って咲く」という意味でとることができる。しかし、別の解釈も可能かもしれない。すなわち、動詞「待つ」は四段活用であることから、これを終止形でとることも可能である。もし「待つ」を終止形でとるならば、「わたしは陰暦五月になるのを心待ちに待つ。橘の花の香をかぐと……」と解釈することになるだろう。

§4　『古今和歌集』139番歌に潜在する「色好み」

この『古今和歌集』139番歌の先蹤として、中西進は『万葉集』巻10・1966番歌の存在を指摘している。

風に散る花橘を袖に受けて君がみ跡と偲びつるかも[注10]

この万葉集の歌にあらわれるモチーフ（題材）である「花橘」と「恋人の香り」の関連性や、その背景に潜在する「色好み」の発想など、『古今和歌集』139番歌の世界を構成する要素が揃っている。しかも、この『万葉集』の歌には過去の助動詞「き」が使用されていることから、「君」との交際は絶えることなくつづいている。

このことを踏まえて、『古今和歌集』139番歌に詠まれた「昔の人」とは、どのような人物のことを意味するのか、考えてみたい。『古今和歌集』139番歌と同じ歌が、『伊勢物語』60段にも記される。『伊勢物語』では、「昔の人」は、別の男と駈け落ちして去った元妻として設定される。このことからも、「昔の人」は、単なる昔馴染み程度の知り合いなどではないのは明白である。「昔の人」は、親密に交際していた元恋人や元配偶者の意味で取らねばならない。そして、元妻と元夫の再会の場面で、元夫がこの歌を詠み、それを聞いた元妻はいままでの己の所業を恥じて出家することになる。このとき、元妻と駈け落ちした今の夫は饗応役としてあり、元夫は朝廷からの使者として赴いて来ている。当然のことながら、元夫は意趣がえしをするに違いないと元妻は思った筈である。ところが、違った。元妻が自己反省をするためには、元夫の詠んだ歌は、さきの『万葉集』1966番歌と同様に、今もつづく元妻への思いが詠み込まれていたのである。それゆえ、元妻は今までの自己中心的な生き方を情けなく思って出家する。『古今和歌集』仮名序にも言及される、和歌と「色好み」の深いつながりも、こうした文化コードに基づく「状況」を踏まえつつ解釈することができる。

§5　『古今和歌集』139番歌における構文《……已然形＋接続助詞「ば」》

『古今和歌集』139番歌において、「昔の人」の検討を踏まえて、つぎに構文《……已然形＋接続助詞「ば」》の解釈を検討したい。この構文は、上の句（本）と下の句（末）を連結する箇所で使われた。この構文《四段動詞「かぐ」の已然形「かげ」＋接続助詞　「ば」》は、普通、§２で述べた第３用法として解釈される。すなわち、

たまたま橘の花の香りをかぐと、元恋人（元配偶者）の袖の香りと同じ香りがすることだよ。

と、偶然に橘の花の香りをかいだという今の出来事が、今もつづく元恋人（元配偶者）への思いへとつながっていく解釈である。過去の助動詞「き」が使われていないのは、§４で考察したように、今も「昔の人」への思いを抱いているからである。過去の出来事としてピリオドを打ったわけではない。たしかに「昔の人の袖の香」は、われわれ現代人の理屈からみれば、過去の記憶に基づくものと考えるのが穏当だろう。しかし、『古今和歌集』当時の詠み手の意識としては、「昔の人」への思いは、昔から今に到るまで切れ目なく連綿とつづいているために、過去の出来事としてみていないのである。この第３用法（偶然条件）による解釈は、東縁・宗祇『古今和歌集両度聞書』で「昔の人などを思ひたる折節、かくよめるさまなり」と記されるように、流布した一般的な解釈であったといえる。

しかし、この第３用法（偶然条件）による解釈しかないかといえば、決してそうではない。試みに第２用法（順接確定条件）で解釈してみると、つぎのようになるだろう。

橘の花の香りをかぐので、昔の恋人（元配偶者）の袖の香りと同じ香りがするなあ。

と、このとき、「橘の花の香りをかぐ」行為と、昔の恋人（元配偶者）への思いとの間には、何らかの因果関係が存在する。この場合、昔の恋人（元配偶者）への思いを必然的に想起させる理由があることになる。その理由が、『古今和歌集』の詞書や左注などに記載されていれば、まったく問題ない。しかし、記載がない場合は第２用法（順接確定条件）による解釈は無理があることになる。言い換えれば、どのような状況で、この歌が詠まれたかによって、歌の解釈が変異するのである。理由としてふさわしい状況ならば、第２用法で解釈でき、また、ふさわしくない状況であるならば、第２用法に基づいて解釈することが不可能になる、ということである。すでに§３で述べた通り、ことばだけで解釈を決めることはできない。そのことばが、どのような状況で使用されたか、考察しない限りは解釈を決定することは不可能だということである。

ところで、こうしたことばの解釈にかかわる問題は、ある解釈を成立させるためには、逆に、ある状況の存在を事前に前提とせばならないということである。ことばの解釈とそのことばの使われた状況は、相互に密接に関連している。『古今和歌集』139番歌における構文を第２用法（順接確定条件）で解釈するということは、その解釈を支持する具体的な状況の存在をまえもって必然的に要求する。

それでは、つぎに、構文「かげば」を第４用法（恒常条件・恒時条件・一般条件）に基づいて解釈してみよう。

橘の花の香りをかぐと、いつも必ず昔の恋人（元配偶者）の袖の香りと同じ香りがするなあ。

この場合、橘の花の香りをかぐときには、いつでも、昔の恋人（元配偶者）の袖の香りと同じ香りがする、という意味になる。

この解釈には、今までの用法と異なる、重大な相違点がある。これまでの用法の場合、偶然条件であろうと、順接確定条件であろうと、基本的には一回だけの特定の出来事であった。ところが、第４用法（恒常条件・恒時条件・一般条件）の場合は、何度でも、誰であっても、橘の花の香りをかぐという条件を満たせば、必ず、昔の恋人（元配偶者）の袖の香りと同じ香りがする、という解釈になる。そして、このような解釈を不自然に感じさせないための状況がないといけない。こうした状況としてふさわしいものは、人びとに共有されるものしかなく、共同体に共有される伝承や伝説しかないだろう。もともと歌と一緒に受け継がれてきた伝承や伝説がすでに散逸してしまい、歌だけが残って共有されるようなことも考えられる。なかでも、存在の可能性のありそうな場合としては、「民謡」のような歌謡のかたちで共同体に伝わる場合が推測される。「民謡」の場合、具体的でないために、かえって共同体の民衆は自分をその「民謡」によって暗示された伝承世界に投影しやすくなる。そして、このような民謡として、139番歌があったとすれば、「かげば」を第４用法（恒常条件・恒時条件・一般条件）に基づいて解釈しても、それほど不自然ではなくなるだろう。そしてさらに、139番歌には、具体的な詠み手の名が記されず、「よみ人知らず」となっている。このことも、139番歌が、民衆によって受容された「民謡」としてみなされやすくなっている可能性をうかがわせるものである[注11]。

このように、「かげば」という《……已然形＋接続助詞「ば」》構文の解釈も、必ずしも固定したものではなく、その和歌が詠まれた《状況》によって、さまざまに変化する可能性をもったものであることが明らかとなる。したがって、そのことばがもちいられていた「状況」がわからないと、そのことばの精確な「解釈」がで

きないといえる。

§5　「解釈」と「状況」との相互関連

以上の検討から、ことばがもちいられたときの「状況」において、そのことばの「解釈」のあり方が決まっていき、またそれと同様にして、ことばの「解釈」によって、そのことばのもちいられるときの「状況」をあり方が推測されていくことがわかった。

このような「解釈」と「状況」との相互関連は、表現文法を考えるうえで重要な指標となる。すなわち、従来の規範的な文法は、すでに決定された「状況」下における、固定的な「解釈」を強制するものであった。これに対して、「解釈」の多様性をみとめることによって、どのような「状況」が発生するか、その創造的な志向性に注目することが、表現文法の可能性をひらくことにつながることは間違いない[注12]。

尚、古文の引用は特にことわらないかぎり、新古典文学大系に依拠した。表記はわかりやすいように、適宜改めている。

［注］

1　本稿における「国文法」と「日本語文法」との相違は、おおよそ以下の通りである。「国文法」とは、日本語を第一言語（母国語）とする日本人（もちろん日本国籍をもつ者とは限らない）にとっての、日本語の文法を意味し、それに対して、「日本語文法」とは、日本語を第二言語（母国語ではない外国語）とする外国人にとっての、日本語の文法を意味している。近年、「国語学会」が「日本語学会」へと学会の名称を変更したことからうかがえるように、ナショナリズムへの反省から、「国語」を国際的にひらかれてもいる「日本語」として措定しようとする動きが顕著になってきている。しかし、その一方で「全国国語教育学会」と「日本語教育学会」は、いまだ並立したままであり、大きな歩みよりは認められない状態にある。

2　北原保雄『表現文法の方法』(大修館書店、1996)、p.54。

3　北原保雄・前掲書、p.54。

4　北原保雄・前掲書、p.56。

5　新編日本古典文学全集『平家物語二』(小学館、1994)、p.228。

6　新日本古典文学大系5『古今和歌集』(岩波書店、1998)、p.57。

7　新編日本古典文学全集『古今和歌集』(小学館、1994)、p.78。

8　新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』(小学館、1999)、p.102。

9　北原保雄・前掲書、pp.252－80。係助詞「ぞ」のまえにある「昔の人の袖の香」に焦点がおかれている論拠は、この北原論文を踏襲したものである。

10　新編日本古典文学全集『万葉集三』(小学館、1995)、p.66。

11　中塩清臣「「五月待つ」考」〔「和歌文学研究」第6号（和歌文学会)、pp.23－32〕。139番歌と田植え歌とのかかわりについて考察されている。これも「民謡」としての解釈と状況を試みたものといえるだろう。

12　このような創造的な試みとして、出雲路修『古文表現法講義』(岩波書店、2003）をあげることができる。

The Readings of the 139th Tanka in *Kokin-Wakashu*

Ozawa Jirou*

Abstract : In this paper, I study the readings of the structure of 139th Tanka in *Kokin-Wakashu*.

Key words : *Kokin-Wakashu*, Tanka, Readings, expressions, Grammer,
Particles : Ba, Zo.